



米子市福市考古資料館通信

第2号

2021年10月



企画展「発掘で解った米子城」開催中

福市考古資料館では、米子市が進めている米子城跡整備に伴う発掘調査で解ってきた様子を理解していただくために、調査遺構の写真や出土遺物を展示して紹介しています。

観覧無料ですので、是非、来館下さい。お待ちしております。

「 発掘で解った米子城 —戦国から江戸へ— 」 展

米子城は、応仁～文明年間（1467～1487）年に砦として築かれたのが始めと伝えられ、戦国時代末に毛利氏の吉川広家が、湊山に本格的な築城を開始したと城と言われます。湊山を中心に、諸郭を築き、内堀と中海で囲み、外郭に武家屋敷を置き、外堀を巡らした縄張りです。近年、整備計画に伴い発掘調査がされて、新しい知見が増えつつあります。吉川氏、中村氏、加藤氏、池田氏、荒尾氏と城主が変わりましたが、明治12年頃に壊されるまで城の建物は存続しました。

発掘で判明した米子城の遺構写真、出土遺物でかつての米子城の姿や暮らしを解説しています。

戦国の名残り

久米第一遺跡 昭和63（1988）年に鳥取大学病院の建設に伴い、米子城跡の三の丸の西側にあたる場所にあった旧稲田酒造の敷地内で調査されました。米子城の遺構は、16世紀の中葉～後葉の埋立てした遺構面で、掘立柱の建物跡や多数の井戸が発見されました。

築城が始められた頃に、中海の水際を埋め立て、防御施設などを造っていたことを物語っています。また、青磁・青花等の貿易陶磁も発見されています。



久米第一遺跡埋め立て土層

発掘された城の施設

内堀 江戸時代の絵図では、内堀の幅が「十六間半」であったと書かれ、「一間」を2mとすると、内堀の幅は33mもあったこととなります。発掘調査で確認された石列の位置から33m北の地点は、ちょうど内堀通りの歩道の端と合致することから、この範囲が内堀であることが分かりました。



内堀の石列

水手御門下郭 水手御門下の深浦側に尾根方向に伸びる石垣を巡らせた上下二段の郭が調査されました。中海に張り出したこの郭は、非常に重要な防衛拠点だったと考えられますが、ある時期に破壊（破城）されていました。

登り石垣 山の斜面を登るように築かれた石垣で、斜面に石垣の障壁を設け、敵の侵入を防ぐものです。豊臣秀吉の朝鮮出兵時に朝鮮半島に築いた倭城に用いられた石垣で、日本では伊予松山城や淡路洲本城などに残っています。吉川広家も朝鮮に出兵しており、倭城の技術を米子城築城に持ち込んだものと考えられます。

豎堀跡 豎堀とは、等高線に対して直角に設けた堀で、敵の横方向への斜面移動を遮断するものです。確認された豎堀は、二の丸枅形から本丸番所跡方向に直線的に延びています。地形を巧みに利用して何重にも防御態勢を備えた米子城の姿が垣間見えます。

八幡台 八幡台では整地盛土による地業面全体に石垣加工時の石碎片や、大型切石などが検出されました。幕末頃の磁器碗片や多量の瓦が出土し、瓦には嘉永癸丑（嘉永6年〔1853年〕）の年号が刻印されており、幕末に鹿島家が行った四重櫓の補修作業場です。しかし、その盛土下部から野面積の石垣が発見され築城当初の郭跡と考えられます。

登城路 現在の園路舗装下 20 cm程の所に、方形の切石3～4個分の石列があり、近世の登城遺構面として確認され、江戸時代の登城路の石段と推定されました。

発掘された武家屋敷

武家屋敷跡 内堀と外堀の間には武家屋敷が設けられ、外堀の外には町屋が鍵の手状に取り巻いていました。

発掘された武家屋敷からは、掘立柱建物跡、建物礎石列、屋敷境界石垣、柵列、井戸、用水路、排水路溝、暗渠、土坑、瓦溜りなどの遺構が検出されました。屋敷の裏には井戸、用水路、排水溝が設けられ、都市機能として街区に張り巡らされていたと考えられます。



水手御門下郭石垣



登り石垣



豎堀



石垣積の用水路

発行者 米子市福市考古資料館（指定管理者 一財・米子市文化財団）

住所 〒686-0011 米子市福市461-20番地

電話・fax 0859-26-3784（同番号）

受付 受付員の木下、松浦が交代で勤務しています。（火）祝祭日の翌日休館